

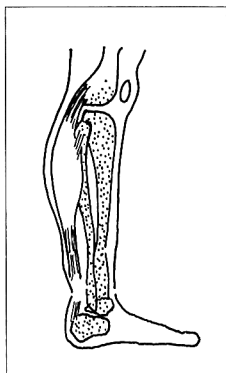
準備運動

統計課 中 嶋 定 信

「アキレス腱が切れています！」医師から言われたとき、目の前が真っ暗になった。それは今年の5月の日曜日だった。野球のプレー中、第2打席目の出来事だった。鋭い“ポテポテ”の打球はサードベースの右を抜けた。それを見てファーストベースを回ってセカンドベースへ向ったその瞬間、左足首に痛みが走り、倒れてしまった。夢中でファーストベースに戻ったが、足首を押さえてみると後側の筋(アキレス腱)が無く、右足首を触って比べてみても、なんとなく切れているのではないかと感じた。アキレス腱を切った人の話とかマスコミ等で、腱を切るとどうなるか、多少は知っていたが、つま先立ちができないのには愕然とした。

それから入院生活が1ヵ月続いた。まず手術後10日間は左足全部を石膏で固定、それから膝の下までのギプスを4週間(そのうち、足首の角度を変えてギプスの巻き直し1回)と長い不自由な松葉杖の日々が続いた。

やがて待ちに待ったギプスを取る日が来た。ギプスが取れた時の開放感は何ともいえないさわやかな感じで、これで二本足で歩けると思うと嬉しかった。しかし、第1歩を床におろして歩こうとしたが足に力が入らず思わずよろけてしまった。足の筋肉は落ちてしまい、足首は曲がらない。又挫折感に陥った。それから数ヵ月リハビリテーションを行っているうちに、なんとかかつての自分の足のように感じられるようになってきた。あれは8月始め頃であったか。医師から軽い運動はやってもいいと言われた時は心がはずみ、その日



事故直前の勇姿

の帰りにはゴルフ練習場に足を運んでしまった。今まで待ち遠しかったクラブがこの手に戻ってきたのである。5ヵ月たった今は、まだ完全に腱が元どおりに延びた感じはないが、ゴルフのプレーはできるようになったし、又軽く走れるようになった。

ところで、アキレス腱断裂がどうして起きるのだろうか。普通、トレーニング不足、準備運動不足で急に過激な運動を始めたときに腱断裂が起りやすいそうだが、トレーニングを積んだ人でも筋肉疲労のひどいときに何度も何度も同じリズムで同じ運動を繰り返しているうちに腱断裂を引き起こすことがあるそうだ。こういう場合、断裂を起こす前にその局所に鈍痛、重だるい感じ、こわばった感じに気づいていることが多く、これは運動をしすぎて筋肉や腱が疲労し、これ以上の運動に耐えられないという予報とも考えられるので、そのときにはあまり無理をせず休養するとかして、疲労回復を図ることが非常にたいせつなことだそうだ。

私の場合は前者だが、これからはスポーツをする時には、十分準備運動をしたうえで行いたいものである。二度と手術台には乗りたくないから！

経 済 動 向

国 内 の 動 き

● 景気、4—6月持ち直す

景気は1—3月期の足踏み状態から、4—6月期は持ち直した。経済企画庁が発表した今年4—6月期の国民所得統計速報によると、国民総生産（GNP、季節調整値）の実質伸び率は、1—3月期に比べ1.9%、年率換算した瞬間風速で7.9%となった。米国向け自動車を中心に輸出が伸

びたうえ、前期にさえなかった設備投資も好転したのが主因。しかし、個人消費の伸びは鈍かった。企画庁は1—3月期と4—6月期をならしてみた年率4.8%成長（政府経済見通しは今年度4.6%成長）が経済の実勢に近いとみている。（日経 9月21日付）

● GNP基準年次を改定

経済企画庁は、昭和50年を基準としていたこれまでの国民所得統計を55年基準に改め、確報が出ている58年度までについての国民総生産（GNP）などの改定値を発表した。それによると、58年度の名目GNPは新基準で283兆9176億円と旧基準に比べ5兆3264億円上方改定された。今回の改定では名目成長率はおおむね上方に、実質成長率は下方

に改定された。名目成長率が上昇したのは、55年産業連関表の商業マージンが増え、民間最終消費支出を上方に押し上げているため。58年度についてみると、名目成長率は4.3%と0.1%上方改定され、民間最終消費支出は4兆4905億円増えている。（日経 10月5日付）

県 内 の 動 き

■ 経 済

● 茨城県企業は厳しい見通し

日本銀行水戸事務所は60年度下期の茨城県内の企業短期経済観測調査結果をまとめた。輸出の鈍化傾向を反映して電気機器の売れ行き不振、公共投資減から窯業・土石、建設が後退するなど、全体としては先行きが厳しいとの業況見通しが強まっている。調査時点は60年8月で、回答企業

数は68社。業況判断のめやすとなるD・I指数（「良い」とする社の割合から「悪い」とする社の割合を引いたもの）は、8月時点の全産業がマイナス20で、前回（5月）の予測に比べ、2倍になっている。12月までの予測もマイナス16で、景気浮揚について期待薄。（日経 9月29日付）

■ 産 業

● 昨年の農業粗生産額1.8%増

関東農政局茨城統計情報事務所がまとめた59年の農業粗生産額は5307億6500万円で、前年を1.8%上回った。豊作で収穫量が大幅増加した米作が、前年に比べ179億1300万円、12.6%伸びたのを筆頭に、作柄が良好だったイモ類、

高価格に支えられた肉用牛などが好調だった。反面、異常低温に悩まされた麦類、過剰生産の野菜、収穫量が大幅に低下した養蚕などが不振で、作物による差が大きかった。（日経 10月2日付）

■ そ の 他

● 県北平坦部で上昇（地価公示）

茨城県は、国土利用計画法に基づいて実施した7月1日現在の地価調査の結果を公表した。調査対象区域は92全市町村の643地点。うち宅地関係の平均変動率は2.4%増で、上昇率は前年比0.8%減となった。これで56年以来5年連続の鈍化となり、地価の安定化傾向が一段と強まった。今回の特色は住宅地の価格水準が高値安定の頭打ち状態にある

首都圏のベッドタウン・県南に変わって、勝田市や水戸市、大洗町など県北平坦部での上昇。常磐自動車道の北伸や国道50号バイパス、大洗鹿島線の開通といった交通体系整備に加え、ポスト万博の常陸那珂地区総合開発への期待のあらわれとみられる。（いはらき 10月1日付）